

神戸グローバルチャレンジプログラム
平成28年度外部評価報告書

国立大学法人神戸大学
大学教育推進機構

平成29年3月

目 次

1. 外部評価の実施にあたって	1
2. 神戸グローバルチャレンジプログラム 平成28年度外部評価委員会	2
2-1. 実施計画	2
2-2. 出席者名簿	3
2-3. 神戸グローバルチャレンジプログラムの概要について	4
2-4. 各取組部局の取組についての発表及び質疑応答	8
2-5. プログラム全体についての質疑応答・意見交換	34
2-6. 外部評価委員の講評	38
3. 外部評価委員による外部評価報告	40

1. 外部評価の実施にあたって

神戸グローバルチャレンジプログラム委員会委員長

阪野智一

平成 27 年度の文部科学省「大学教育再生加速プログラム」(AP) に採択された神戸グローバルチャレンジプログラムは、本事業実施に向けた一連の体制整備を行った後、平成 28 年度より、13 のコースを開始した。平成 29 年 2～3 月に学外学修活動が予定されている 4 コースを除き、すでに 9 コースが実施されたことを踏まえ、外部評価を受けることにした。外部評価委員をご快諾いただいた塩川雅美先生、杉本均先生、堀江未来先生には、この場をお借りして心より厚くお礼申し上げたい。

神戸大学では、「自ら地球的課題を発見しその解決にリーダーシップを発揮できる」実践型グローバル人材の育成を教育目標に掲げ、平成 28 年 4 月から、教育改革を実施している。神戸グローバルチャレンジプログラムは、大きく次の 2 点において、教育改革の中に位置づけられ、その効果をさらに高めることを狙いとしている。

第 1 は、2 学期クォーター制の導入である。これにより、学生は特定のクォーターをギャップタームとして利用することが可能となり、海外短期留学、海外インターンシップ等の様々な学外学修活動に参加しやすくなった。第 2 は、神戸スタンダードと教養教育の改革である。本学の全学生が卒業時に身に付けるべき 3 つの共通の能力を「神戸スタンダード」として定め、その修得のため、これまで主として 1・2 年生が学修していた教養科目を見直し、平成 28 年 4 月から「基礎教養科目」及び「総合教養科目」に再編した。神戸チャレンジプログラムとして実施される各コースの学修成果は、総合教養科目の「グローバルチャレンジ実習」として単位授与される。これまでインターンシップ等の学外学修活動の単位授与については、各学部の裁量に任せられていた。これに対して、総合教養科目として単位授与されることにより、本プログラムは全学的な教養教育改革の中に体系的に組み込まれていると言ってよいであろう。

神戸グローバルチャレンジプログラムは、学部の 1・2 年生を対象とし、国際的なフィールドで行う主体的な学修活動を通じて、「神戸スタンダード」の必要性を体感し、「学びの動機づけ」を得ることを目的としている。外部評価委員会では、本プログラム全体の概要に続いて、各取組部局に取組内容とその成果について順次報告させていただいた。学生自身の生の声を聞いていただくために、大学教育研究推進室が企画・実施したコースの内、インターンシップチャレンジコースについては、参加学生がプレゼンを行い、また質疑応答にも参加した。

外部評価委員の先生方には、本年度前半までの取組を中心に、本プログラムについて忌憚ないご意見、ご批評をいただいた。ご指摘いただいたご意見や課題等を本事業の今後の改善に向けて活かしていければと願っている。

2. 神戸グローバルチャレンジプログラム 平成28年度外部評価委員会

2-1. 実施計画

1. 日 時 平成29年2月20日(月) 14時～17時
2. 場 所 神戸大学鶴甲第1キャンパス N棟402
3. 外部評価委員
 - 塩川 雅美 氏 元 梅光学院大学 副学長 (国際交流担当)
 - 杉本 均 氏 京都大学 大学院教育学研究科教授
 - 堀江 未来 氏 立命館大学 国際部副部長・国際教育推進機構准教授
4. 次 第
 - (1)開会挨拶 神戸大学大学教育推進機構長 藤田 誠一 ≪14:00～14:05≫
 - (2)神戸グローバルチャレンジプログラムの概要について ≪14:05～14:15≫
神戸グローバルチャレンジプログラム委員会委員長 阪野 智一
 - (3)各取組部局の取組について (質疑応答含む) ≪14:15～15:33≫
 - ① 経済学部
 - ② 国際文化学部
 - ③ 発達科学部
 - ④ 法学部
 - ⑤ 理学部
 - ⑥ 農学部
 - ⑦ 工学部
 - ⑧ 国際教育総合センター
 - ⑨ 大学教育研究推進室
 - (休憩) ≪15:33～15:50≫
 - (4)質疑応答・意見交換 (学生5名を含む) ≪15:50～16:40≫
 - (5)外部評価委員会委員講評 ≪16:40～17:00≫
 - (6)閉 会

※配付資料一覧

1. 神戸グローバルチャレンジプログラム平成28年度外部評価委員会実施計画・出席者名簿
2. プログラム概要プレゼンテーション資料
3. 各取組部局プレゼンテーション資料
 - ① 経済学部 ② 国際文化学部 ③ 発達科学部 ④ 法学部 ⑤ 理学部 ⑥ 農学部
 - ⑦ 工学部 ⑧ 国際教育総合センター ⑨ 大学教育研究推進室
4. 神戸グローバルチャレンジプログラム 平成27～28年度自己点検・評価報告書
5. 神戸グローバルチャレンジプログラム 平成27～28年度学内点検・評価
6. 平成27年度「大学教育再生加速プログラム(AP)」計画調書
7. 神戸グローバルチャレンジプログラム パンフレット
8. 神戸グローバルチャレンジプログラム平成28年度外部評価報告書の作成について
9. 参考資料
 - (1) 平成29年度神戸グローバルチャレンジプログラム コース申請書
 - (2) チャレンジシート (事前学修)
 - (3) リフレクションシート (事後学修)
 - (4) 学修目標「3つの能力」に関するルーブリック評価の実施について
 - (5) 神戸グローバルチャレンジプログラム アンケート

2-2. 出席者名簿

●外部評価委員

塩川 雅美 元 梅光学院大学 副学長（国際交流担当）
杉本 均 京都大学 大学院教育学研究科教授
堀江 未来 立命館大学 国際部副部長・国際教育推進機構准教授

●本学事業関係者

阪野 智一 大学教育推進本部副本部長・神戸グローバルチャレンジプログラム委員会委員長
藤田 誠一 大学教育推進機構長
大野 隆 国際教養教育院長
米谷 淳 大学教育研究推進室長
山内 乾史 大学教育推進本部副本部長
近田 政博 大学教育推進本部副本部長
横川 博一 国際コミュニケーションセンター長
藤濤 文子 国際文化学部教授
伊藤 真之 発達科学部教授
古川文美子 発達科学部特命助教
齋藤 彰 法学部教授
宮崎 智視 経済学部准教授
鏑木 基成 理学部教授
大村 直人 工学部教授
石田 謙司 工学部教授
土佐 幸雄 農学部教授
森 直樹 農学部教授
高城 宏行 国際連携推進機構国際教育総合センター特命准教授
杉野 竜美 大学教育研究推進室特命助教（神戸 GCP 担当コーディネーター）
都築 智 国際部長

●神戸 GCP 参加学生

経済学部 2 年生（国際産官学連携アドバンストコース参加）
発達科学部 2 年生（ボランティアチャレンジコース参加）
法学部 1 年生（Lawyering in Asia コース参加）
法学部 1 年生（インターンシップチャレンジコース参加）
文学部 1 年生（インターンシップチャレンジコース参加）

●事務部

高久 和也	学務部学務課長	深田 哲	学務部教育推進課長
林 靖博	学務部学務課長補佐	土本 達也	学務部教育推進課長補佐
泓 幹雄	学務部学務課専門職員	佐々木洋子	国際部国際交流課準事務員
岡 翔子	学務部学務課事務員		
畑中 佑介	学務部学務課事務員		

外部評価委員会では、神戸グローバルチャレンジプログラム（以下「神戸 GCP」という。）に関する概要説明ののち、各取組部局の担当教員及び参加学生より各コースの概要・目的・成果等について発表を行い、それぞれ質疑応答を行った。続いて、プログラム全体に関する質疑応答・意見交換を行い、最後に外部評価委員の講評を受けた。

各議事に関する要旨は、「2-3. 神戸グローバルチャレンジプログラムの概要について」「2-4. 各取組部局の取組についての発表及び質疑応答」「2-5. プログラム全体についての質疑応答・意見交換」「2-6. 外部評価委員講評」として、それぞれ本報告書にまとめている。

2-3. 神戸グローバルチャレンジプログラムの概要について

神戸 GCP 委員会委員長 阪野 智一

本学では、平成28年度に2つの大きな教育改革を実施した。1つは「2学期クォーター制の導入」である。従来の前期・後期の授業期間をそれぞれ半分に分け、各8週で授業を行っている。短期集中型授業による学修効果の向上やギャップタームの活用による学外活動への参加促進を目的として、全学的に導入・開始したところである。もう1つは「新しい教養教育と神戸スタンダード」である。本学の全学部の学生が卒業時に身につけるべき共通の能力として、「複眼的に思考する能力」「多様性と地球的課題を理解する能力」「協働して実践する能力」の3つの能力を「神戸スタンダード」として定めた。この「神戸スタンダード」を全学部の学生が身につけるため、従来1・2年生が学修していた教養科目を見直し、「基礎教養科目」及び「総合教養科目」として再編するとともに、専門分野を学んだ高学年も対象とする新たな科目として「高度教養科目」を設け、4年間を通じて学ぶ教養教育のカリキュラムを開始した。

神戸 GCP は、これら神戸大学全体の教育改革の中に位置づけられている。その概要は、2学期クォーター制を利用して、1・2年生が1つのクォーターや長期休暇を「チャレンジターム」として設定し、その期間に学生が国際的なフィールドで学修活動を行い、その学外学修活動、及び事前・事後学修の学修成果に対して、総合教養科目「グローバルチャレンジ実習」として単位を授与するものである。

本プログラムでは、神戸大学の教育目標である「自ら地球的課題を発見し、その解決にリーダーシップを発揮できる」実践型グローバル人材の育成を大きな実施目的としており、本取組による効果として「課題発見・解決能力の必要性に気づき」「学びの動機づけ」「主体的学修の促進」「上学年で更なる国際的なフィールドでの活動にチャレンジする精神の育成」「英語力の向上」などが期待されている。また、「神戸スタンダード」とは別に、本プログラムにおける3つの共通目標能力を設定しており、各コースに参加した学生の教育成果を客観的に測定するために、プログラム全体で統一したルーブリックを制定している。

本プログラムの各コースにおける具体的な取組については、このあと各取組部局の担当教員や参加学生より説明させていただくが、プログラム全体としては、参加学生がコースの

枠を越えて情報共有し、学修上の刺激を受ける機会とすべく、10月第4週の1週間を「神戸グローバルチャレンジプログラム週間」と定めて8～9月に実施したコースの全体報告会をラーニングコモンズで実施した。参加学生の代表が活動や学修成果についてパワーポイントを用いて報告・発表するとともにパネル展示を行い、活動状況を学内に広く発信した。

本プログラムにおける3つの目標能力、すなわち「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」については、事前学修時と事後学修時にルーブリック指標に基づき自己評価を行った。その結果、いずれの能力についても本プログラムへの参加によって向上したことが確認できた。また、参加後のアンケートからは、参加したコースへの満足度は高く、また大半の学生が目標通りの学修成果を得られていることを確認した。

本学におけるグローバル化を促進する様々な取組の中で、1・2年生を対象とした本プログラムは、上位学年での各種プログラムに参加する学生を育成する取組として位置づけられており、申請時のポンチ絵のとおり、卒業時には「神戸スタンダード」を身につけ課題発見・解決型グローバル人材となることを目標としている。今後の課題としては、参加学生の学外学修活動での気づき・経験をどのように次のステップへつなげるかという点や本プログラムの認知度向上、また神戸大学基金等により行っている学生への経済的支援へのさらなる取組などがあげられる。

なお、本プログラムを実施するにあたっては、大学教育推進機構の中に「神戸グローバルチャレンジプログラム委員会」を設置している。同委員会では、実施コースの審査・認定を行うほか、各コースの実施状況の点検、予算執行、参加学生の単位授与、関連する制度の整備、学外学修活動時の危機管理体制の構築、本プログラムの周知・広報、その他本プログラムの運営に関する意思決定を行っているところである。



神戸大学の教育改革と神戸グローバルチャレンジプログラム
—課題発見・解決型グローバル人材の育成をめざして—

神戸グローバルチャレンジプログラム実施責任者 阪野 智一

FEEL THE GLOBE!
CHANGE YOUR WORLD!
Kobe Global Challenge Program

2学期クォーター制の導入

前期・後期の授業期数をそれぞれ半分に分け、各8週で授業を行う制度です。神戸大学では、教育改革の一環として平成28年度から全学生（一部除く）を対象にこの制度を導入しています。

【平成28年度からの学期区分】

平成27年度まで												
4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
前期						後期						
授業						授業						
↓												
平成28年度から												
4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
前期				後期				前期				後期
第1クォーター 第2クォーター				第3クォーター 第4クォーター								
授業				授業				授業				
← 冬休み期間 →												

2学期クォーター制のメリット

学外活動への参加促進

- ギャップタームを利用した留学、海外インターンシップ等、学外活動に参加しやすくなる

短期集中型授業による学修

- 短期間に授業を実施し、クォーター毎に試験を行い、その都度学修成果を確認することにより、集中的に学修することができる

神戸スタンダードと教養教育の改革

神戸スタンダード —卒業時に身につけるべき3つの能力—

神戸大学では、全学部生を対象とする教養教育において、神戸大学の学生が卒業時に身につけるべき3つの共通の能力を「神戸スタンダード」として定めました。そして、この「神戸スタンダード」の修得を教養教育の学修目標としています。

神戸スタンダード
卒業時に身につけるべき3つの能力

複眼的に思考する能力

専門分野以外の学際分野について基本的なものの考え方を学ぶことを通じて複眼的なものの見方を身につけます

協働して実践する能力

専門性や価値観を異なる人々と協働して課題解決にあたるチームワーク力、困難を乗り越え目標を達成し続ける力を身につけます

多様性と地球的課題を理解する能力

多様な文化、思想、価値観を受容するとともに、地球的課題を解決する能力を身につけます

新しい教養教育

神戸大学



プログラム実施目的と期待される効果

神戸大学

■実施目的

神戸大学の教育目標である「自ら地球課題を発見し、その解決にリーダーシップを発揮できる」実践型グローバル人材の育成を目指すため

期待される効果

- 🔪 「課題発見・解決能力」の必要性に気づく
- 🔪 学びの動機づけ
- 🔪 学生の主体的学修の促進
- 🔪 上学年で更なる国際的なフィールドでの活動にチャレンジする精神を育成
- 🔪 英語力の向上

神戸グローバルチャレンジプログラム概要

神戸大学

概要

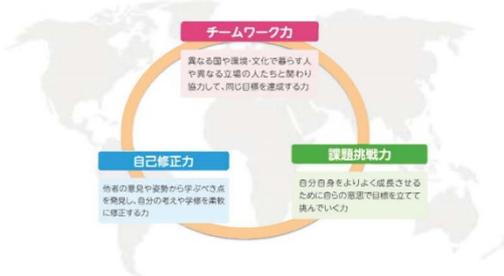
2学期クォーター制を利用し、1・2年生が1つのクォーターや長期休暇を「チャレンジターム」として設定し、その期間に学生が国際的なフィールドで学修活動を行うプログラム

特色

- 平成28年度は8部局で14コース、平成29年度は8部局で14コースをアジアや欧米等で実施
- 多様なコースの学外学修活動、及び事前・事後学修の学修成果は、総合教養科目の「グローバルチャレンジ実習」として単位授与
- プログラムで養う3つの共通目標能力を設定。各コース参加学生はその能力を渡航前と渡航後で自己評価

プログラムの3つの目標能力

神戸大学



プログラムの開講コース(平成28年度)

神戸大学

<ul style="list-style-type: none"> ・ニューヨーク・ウィーンズの歴史と都市研究 ・ハンブルク異文化理解コース ・カナダ・トロントの多文化社会研究 <p>国際文化学部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アジアフィールド・ワークコース <p>経済科学部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・Lawyering in Asia <p>法学部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・国際官学連携スタートアップコース ・国際官学連携アドバンスコース <p>経済学部</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・キヤンダム海外研修実践コース <p>工学部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・UPLB農業英語コース <p>農学部</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・EUフィールドワークコース <p>国際教育研究センター</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・グローバルチャレンジコース(海外実習) ・インターンシップ・チャレンジコース ・フィールドワーク・チャレンジコース ・海外フィールド・チャレンジコース <p>大学教育研究推進室</p>

全体報告会

神戸大学

H28年8～9月実施コース

開講部局	コース名	学外学修活動先(国・地域)
国際文化学部	ハンブルク異文化理解コース	ドイツ・ハンブルク
国際文化学部	トロント多文化社会研究	カナダ・トロント
発達科学部	アジアフィールドワークコース	インドネシア・南スラウジャ州
法学部	Lawyering in Asia	ロシア・ケラル半島
経済学部	国際官学連携スタートアップコース	国内(東京、大阪、神戸)
経済学部	国際官学連携アドバンスコース	ベトナム・ハノイ
農学部	UPLB農業英語コース	フィリピン・ロスバヨス
大学教育研究推進室	インターンシップチャレンジコース(ミャンマー)	ミャンマー・ヤンゴン
大学教育研究推進室	海外フィールドチャレンジコース(ネパール)	ネパール・ネパルコト、ダゲチン郡

全体報告会

神戸大学



各コース活動報告の様子

神戸グローバルチャレンジプログラム週報を設け、パネル展示でも活動報告を実施

3つの目標能力に関するルーブリック指標

神戸大学

	水準0	水準1	水準2	水準3
チームワーク力	水準1に達しない段階	一参加者としての段階	周辺の立場から運営に関わる段階	リーダー役やマネージャー役を果たす段階
自己修正力	水準1に達しない段階	他者からの指摘に耳を傾ける段階	指摘の意味を把握し自分のものとする段階	自己の思考や学修方法を適切に修正できる段階
課題挑戦力	水準1に達しない段階	与えられた問題の解決に必要な能力を見極める段階	挑戦する価値のある課題を設定する段階	課題を解決するための方法を決定し不確に挑戦し続ける段階

3つの目標能力に関する自己評価



<実施方法> 今年度前期に実施された計3コースの事前学修時と事後学修時に、参加学生が神戸大学学生満足システム(SIS)を利用し、グループワーク前後に基づき自己評価を行った。
 <参加学生数> 56人
 <事前学修時> 94人
 <事後学修時> 80人 (H29年1月5日集計)



H29年2～3月実施コース(予定)

開講部局	コース名	学外学修活動先(国・地域)
国際教育総合センター	EUフィールドワークコース	ベルギー・フランス・ドイツ
大学教育研究推進室	グローバルチャレンジコース	ネパール
大学教育研究推進室	ワールドワートチャレンジコース(メンバー)	ミャンマー
大学教育研究推進室	ワールドワートチャレンジコース(タイ)	タイ
大学教育研究推進室	ホリティアチャレンジコース(ラオス)	ラオス

プログラム参加後のアンケート結果

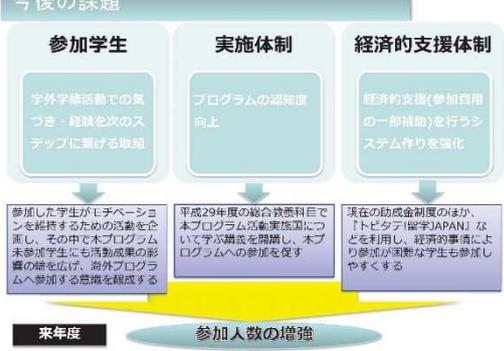


神戸大学のグローバル化を推進する主な取組

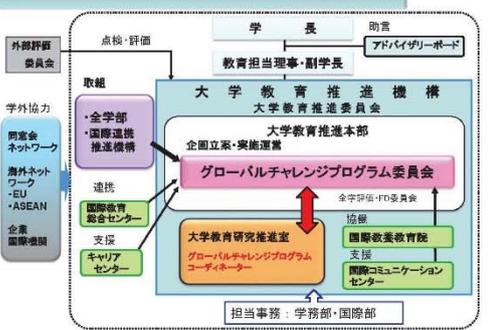
～神戸大学グローバルエクセレントコースの真髄～

学部	学部	学部	学部	学部	学部	学部	学部	学部	学部
経済学	法学	文学	理学	工学	農学	医学	歯学	薬学	看護学
国際教育総合センター	国際教育推進室								

今後の課題



神戸グローバルチャレンジプログラム実施体制図



2-4. 各取組部局の取組についての発表及び質疑応答

(発言者 ○：外部評価委員 ●：本学教職員 ◎参加学生)

(1) 経済学部 (発表者：宮崎 智視 准教授 (経済学部))

(発表内容)

【コース名】

①国際産官学連携スタートアップコース ②国際産官学連携アドバンストコース

【学外学修活動先・期間】

①国内 (東京, 大阪, 神戸) / H28. 8. 12~9. 28 ②ベトナム・ハノイ / H28. 8. 14~9. 3

【参加学生数】

①40名 ②1名

【目的】

●経済学部のグローバル人材育成プログラムにおける導入プログラムとして、2年次以降の学修のためのモチベーションアップを目的に、1年生を対象に「国際産官学連携スタートアップコース」を実施した。また、その上級コースとして、2年生を対象に「国際産官学連携アドバンストコース」を実施した。

【実施内容】

- 「スタートアップコース」では、世界展開している企業や国際機関など、国内で学外活動を実施した。チャレンジシート、リフレクションシートを用いて事前・事後学修を行った (両コース共通)。
- 「アドバンストコース」では、サマースクールを通じた海外研修を実施した。危機管理の専門家による講習やベトナムの社会文化理解のための講習を事前学修にて実施したのち、ベトナムで2つのプログラム (Insight into Vietnam (ベトナムの経済、歴史、文化を知るプログラム) と Summer Academy (アジア地域の国際貿易について学ぶプログラム)) に参加した。

【成果】

- プログラム実施後、経済学部における国際プログラム「IFEK」の登録学生の過半数が「スタートアップコース」に参加した学生であったことから、学生のモチベーションアップには一定の効果があったと考えている。
- 「アドバンストコース」に参加した学生は、実際に業務に携わっている人の話を聞くことで、学生のキャリアへの意識を高めることができた。また、大学で学んだ経済理論と「実際」とのつながりを認識する上で効果があった。

(質疑応答)

* 事前・事後学修の内容について

○事前学修・事後学修の具体的な内容を教えてほしい。

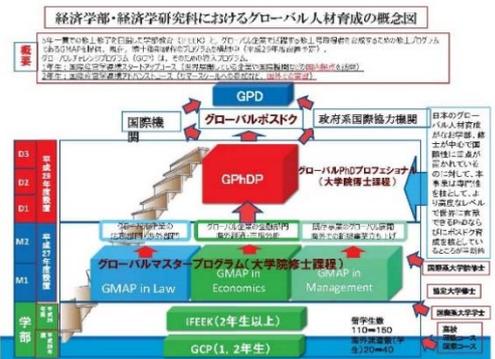
●スタートアップコースについては、事前学修にて訪問マナーや日本企業の現状についての講習等を行い、事後学修にて報告会準備や講習等を行った。

(参考) 発表資料

グローバルチャレンジプログラム・経済学部の取り組み

2017年2月20日 鶴甲N棟402会議室
神戸大学経済学部





1年生対象プログラム

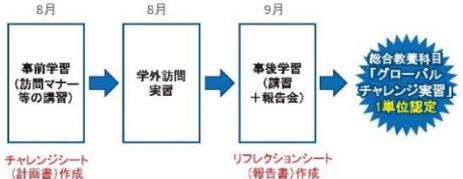
▶国際産学官連携スタートアップコース

▶1単位

夏休み中に、(1)日本に拠点を置く国際機関、(2)日本の国際協力機関、(3)日本に進出している外資および世界展開をしている日本企業を対象に、学内研修と国内を対象とした学外研修とを実施。

▶目的: 二年代以降の学習のためのモチベーション・アップ。

スタートアップコースの流れ



8月 事前学習 (訪問マナー等の講習) → 8月 学外訪問実習 → 9月 事後学習 (講習+報告会) → 総合教養科目「グローバルチャレンジ実習」1単位認定

チャレンジシート(計画書)作成 リフレクションシート(報告書)作成

2年生対象プログラム

▶国際産学官連携アドバンスコース

▶1単位

国内での事前学習のほか、国外における実習。

▶学内研修のほか、夏休み中に海外(本年はベトナム・貿易大学)においてサマースクールを通じた学外研修を行う。

▶事前学習①: 危機管理の専門家による講習

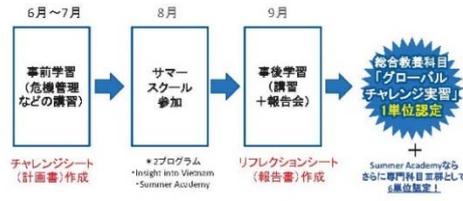
▶事前学習②: 訪問先国の社会文化理解のための講習(全学共通+学部主催)

訪問国と内容

▶訪問国: ベトナム

- Insight into Vietnam: ベトナムの経済、歴史、文化を知るプログラム
- Summer Academy: アジア地域の国際貿易について学ぶプログラム

アドバンスコースの流れ



6月~7月 事前学習 (危機管理などの講習) → 8月 サマースクール参加 → 9月 事後学習 (講習+報告会) → 総合教養科目「グローバルチャレンジ実習」1単位認定

チャレンジシート(計画書)作成 *プログラム: Insight into Vietnam, Summer Academy リフレクションシート(報告書)作成 Summer Academyなら5Gに専門科目3単位として1単位認定!

得られた成果

▶両コース共通の成果:

- 現地に赴き実際に業務に携わっている人の話を聞くことで、キャリアへの意識を高めることができた。
- 大学で学んだ経済理論と「実際」とのつながりを認識する上で効果があった。

▶スタートアップコースの成果:

学部独自の国際プログラムである、IFEKの登録学生の過半数は、本コースの参加者。

→学生のモチベーション・アップには一定の効果。

②国際文化学部（発表者：藤濤 文子 教授（国際文化学部））

（発表内容）

【コース名】

- ①ハンブルク異文化理解コース ②カナダ・トロントの多文化社会研究

【学外学修活動先・期間】

- ①ドイツ・ハンブルク／H28. 8. 1～8. 31 ②カナダ・トロント／H28. 8. 27～9. 27

【参加学生数】

- ①5名 ②16名

【目的】

- 「ハンブルクコース」は、異文化体験を意識化し、差異による気づきや課題解決に向けて思考し議論できる能力を身に付けることを学修目標に掲げて実施した。
- 「トロント大学コース」は、多文化コミュニティの動態を多様な視点から学ぶことを目的として企画・実施した。

【実施内容】

- 「ハンブルクコース」では、ハンブルク大学ドイツ語サマースクールを利用して、午前はドイツ語授業、また午後は街の標識を調査するなど、各自のテーマでフィールドワークを企画・実施した。
宿泊・サポートがしっかりしており、日本語ができるスタッフがいることに加えて、ハンブルク大学の学生と交流する時間が毎日2時間あるなどの利点があった。
- 「トロント大学コース」では、英語研修とは別に、現地小学校、日本人補習校等との交流イベント、難病治療や病院の基金集め等のボランティア活動、エスニックタウンのスーパーマーケット研究等のフィールドワークを神戸GCPとして実施した。

【成果・課題】

- 「ハンブルクコース」に参加した学生は、ドイツ人学生との交流を通じて外国におけるコミュニケーション力の向上を図るとともに、考え方や文化背景の違いを実感することができた。また、自ら企画したテーマでフィールドワークを行うなかで、他の学生と協働しながら積極的に街に出て行くようになり、異文化環境で積極的に行動することにより、異文化と自文化への気づきを得ることができた。
- 「トロント大学コース」に参加した2年生9名のうち4名が長期交換留学に参加することとなり、次への学修へとつなげることができた。また、交流イベントやボランティア活動を企画・奨励し、学生自身にフィールドワーク等の活動時間を記録させるなど、担当教員の工夫により学生の気づきを促すことができた。一方、特に一部の学生に責任感の欠如が見られ、気づきをもたらすことの困難さを感じた面もあり、コースとして適切な参加人数を設定する必要性を感じた。

(質疑応答)

*テーマ設定・コース企画

- ハンブルクコースでは、様々な学部の学生が自らテーマを決めてフィールドワークに取り組んだとのことだが、テーマは学生の所属学部と関連するものだったのか？
- 学生にもよるが、大体の学生は所属学部に関連するテーマを定めていた。
- トロントコースについて、ボランティア活動は学生自身が企画して受入先とコンタクトをとったのか、それとも教員がコーディネートしたのか？
- 基本的には教員がコーディネートした。フィールドワークに関しては学生自身が企画して行った。

*語学研修

- 語学研修については、神戸 GCP とは別に、学生が評価される機会があるのか？
- 語学研修での取組については学部の専門科目として認定している。
- 1回の派遣で、語学研修としての単位認定と神戸 GCP としての単位認定のどちらも受けることがあるということか？
- そのとおりである。その際、それぞれの評価対象となる活動時間をきっちり分け、別々に評価するようにしている。

(参考) 発表資料

<p>1</p> <h3>GCPプログラム(2018国際文化学部)</h3> <ul style="list-style-type: none">・「ハンブルク大学異文化理解コース」 藤濤担当 (ハンブルクコース)・「カナダ・トロントの多文化社会研究」 田中教授担当(トロント大学コース)	<p>2</p> <h3>ハンブルクコース</h3> <ul style="list-style-type: none">・学修目標 異文化体験を意識化し、差異による気づきや課題解決に向けて思考し議論できる能力を身に付けること・ハンブルク大学ドイツ語サマースクールを利用 (午前:ドイツ語授業) 午後:各自のテーマでフィールドワークを企画◎利点・宿泊(寮)・サポートがしっかりしている<ul style="list-style-type: none">・日本語ができるスタッフがいる・ハンブルク大学の学生との交流・エクスカージョンの利用(文化施設等)
<p>3</p> <ul style="list-style-type: none">・募集:2017年12月1日~2018年1月15日 (説明会12月に実施)・参加者:5名(2年生) 全学対象(国際文化2、法1、経済1、経営1)・事前学修:6時間(参加者のテーマ紹介、現地情報、留学経験者の助言、危機管理など)・現地滞在期間:8月1日~8月31日(31日間) (引率教員は8月16日~31日)・事後学修:5時間(帰国報告と振り返り、全体報告会の準備とリハーサル、ポスター制作など)	<p>4</p> <h3>文化施設・歴史的建造物の見学</h3> <p>ノイエンガメ 強制収容所</p>   <p>倉庫街</p>

街の標識を調査



成果

- ・受入先のサポート ⇒スムーズな実施
- ・ドイツ人学生のチュータとの交流
 - ⇒外国におけるコミュニケーション力の向上
 - ⇒考え方や文化背景の違いを実感
 - ⇒帰国後も交流が続いている
- ・自分で企画したテーマでフィールドワーク
 - ⇒挑戦する行動力、積極性、協働する楽しさ
- ・異文化環境で行動することにより、異文化と自文化への気づきを得ることができた
- ・長期交換留学へつながる

カナダ・トロントの多文化社会研究 田中順子教授担当(トロント大学コース)

学修目標

- ・事前学修:集団での討議能力、企画立案能力、交渉能力、実践的な英語の運用能力、危機管理能力の涵養
- ・現地のフィールドワーク:グローバルな現代社会における移民等の非母語話者による言語使用、言語変容、多文化コミュニティの動態を多様な視点から学ぶこと

トロント大学コース:期間と参加者

- ・実施期間:
 - ・2016年8月27日(土)ー9月27日(火)
 - (8月27日から9月3日まで教員同行)
- ・参加者:16名
 - ・1年生 7名(男子2名、女子5名*)
 - *外国人留学生1名を含む
 - ・2年生 9名(男子1名、女子8名)

現地でのプログラム

1. 現地オリエンテーション
2. (英語研修と)アクティビティ
3. 交流イベント:現地小学校、日本人補習校、国際交流基金トロントセンター訪問
4. ボランティア:難病治療や病院の基金集め、野球場のチケット販売
5. フィールドワーク:エスニックタウンのスーパーマーケット研究、スポーツの受容etc.

成果

- ・外国におけるコミュニケーション能力の向上
- ・チャレンジする行動力、調整力、気づき
- ・経験も知識も乏しかった学生が、自分でテーマを設定して現地で調査するという活動について次第に理解できるようになった
- ・今後の学修へのつながりを意識化
- ・2年生の参加者9名の内、4名が長期交換留学へ

2016年度実施分についての特色

1. 学生の気づきを促す方策の導入
 - ・交流イベントを企画し、ボランティア活動を奨励した。
2. 活動時間記録表の導入
 - ・学生自身がフィールドワーク等の活動時間をトラックできた。
 - ・教員は評価に活用できた。
3. 参加者数と学年
 - ・当初の定員15名を超える16名の参加
 - ・1年生の参加

学生の反応と今後の課題

1. 気づきをもたらすことの困難さ
 - ・無反応な人たちに気づきを与えるには現状以上にどうすれば良いか。
2. 一部学生に責任感の欠如
 - ・自分の行動の責任がとれない
 - ・個人行動
3. 適切な人数:12名(4名x3group)?

③発達科学部（発表者：伊藤 真之 教授（発達科学部））

（発表内容）

【コース名】

アジア・フィールドワークコース

【学外学修活動先・期間】

インドネシア・南スラウェシ州／H28. 8. 29～9. 8

【参加学生数】

5名

【目的】

- フィールドワークを通して、異文化環境の下での自らの体験に基づいて、グローバル人材として必要な「課題発見・解決能力」の必要性に気づき、学びの動機づけを得ること、また、実践型グローバル人材として成長するための基盤となる3つの能力（「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」）を修得することを目的として実施した。

【実施内容】

- フィールドワークを通して、グローバル社会における課題発見の方法を学び、その解決へのアプローチについて考える力の基礎を身につけること、また国や地域をこえた様々問題に対して、グローバルな視点とローカルな視点から多面的に捉えようとする探究心を培うことを目標として、インドネシア・南スラウェシ州の農・漁村にてホームステイしフィールドワークを行った。
- 神戸 GCP 参加者5名に上位学年3名を加えた学生8名により、ケケ島での海洋実習をはじめ、ハサヌディン大学・地方政府・地元の高校等の訪問、マングローブ植林体験など、地域が直面する環境問題・社会問題をより深く理解するための活動を行った。

【成果】

- 事後学修や学生レポートより、参加した学生からは、イスラム文化などに対する異文化理解を含む、グローバルな視野の広がりが見て取れた。また、課題発見能力の基礎の習得をはじめとして、国際コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力、そして実践型グローバル人材として成長するための基盤となる3つの能力「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」についても伸長が見られたと評価している。

(質疑応答)

*コースへの上級生の参加

○神戸 GCP としてではないがコースに参加した上位学年の学生がいることで、コース内にはどのような影響があったと思うか？

●意欲のある学生が上級生として参加していた。1～2年生はそのような先輩を目標とすることができ、コースに与える影響は良かったと思われる。また、学部1～2年生の中にも経験が豊富でアクティブな学生がおり、学年を超えた深い交流が見られ興味深く感じた。

(参考) 発表資料

<p>神戸グローバルチャレンジプログラム 外部評価委員会 2017年2月20日</p> <p>神戸グローバルチャレンジプログラム</p> <h3>アジア・フィールドワークコース</h3> <p>(発達科学部)</p> <p>伊藤真之 人間発達環境学研究所/発達科学部</p> <p>アジア・フィールドワークコース</p> <p>目 標 :</p> <ul style="list-style-type: none">• フィールドワークを通して、グローバル社会における課題発見の方法を学び、その解決へのアプローチについて考える力の基礎を身につける• 国や地域をこえた様々な問題に対して、グローバルな視点とローカルな視点から多面的に捉えようとする探究心を培う <p>※ 学生ごとの学修目標については、事前学修で各自設定 ※ 企画段階で、学生によるフィールドワークの立案を考えた が、実施段階でフィールドワークの内容については教員が設定する形に修正した</p>	<h3>アジア・フィールドワークコース</h3> <p>目 的 :</p> <ul style="list-style-type: none">• フィールドワークを通して、異文化環境の下での自らの体験に基づいて、グローバル人材として必要な「課題発見・解決能力」の必要性に気づき、学びの動機づけを得る• 実践型グローバル人材として成長するための基盤となる3つの能力の修得 「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」 <p>アジア・フィールドワークコース コース概要 (平成28年度)</p> <ul style="list-style-type: none">• インドネシア 農・漁村におけるフィールドワーク• 海外フィールド実習期間: 8月29日～9月8日 (11日間)• 事前学修: 計9時間 安全に関する学修、宗教・文化・マナー フィールド調査に関する基礎、交流内容企画 他• 事後学修: 計8時間 実習振り返り、報告取りまとめ 全体報告会におけるプレゼンテーション• 募集人員: 10名 (全学の1,2年生対象)• 引率: 古川文美子、源 利文 (特命助教)
--	--

フィールド：インドネシア・南スラウェシ州



- 道路がてきるまで海域を通して外部世界と接触していたため 独自の文化
- 地形も複雑だが、民族構成も多様
- > 今回のプログラムでは、港を拠点に移住してきた海洋民族プギス人の村に6日間のホームステイ

敬虔なイスラム教徒



2日目：ケケ島 海洋実習
＜環境・文化理解＞



参加学生

学号	学部	学年	性別	参加理由
1	発達科学	1年生	男	国際NGOに興味
2	発達科学	1年生	女	国際機関・途上国の教育に興味
3	医学(保健)	1年生	女	東南アジアの医療環境に興味
4	国際文化	2年生	男	普段行けない場所に行きたい
5	国際文化	2年生	女	海外でボランティア活動をやりたい
6	発達科学	3年生	男	---
7	農学	4年生	男	東南アジアの農村生活に興味
8	農学	修士1回	女	インドネシアに興味



3日目：ハサヌディン大学訪問
(連携大学)



ハサヌディン大学と神戸大学の学生へア

5日目：地方政府訪問・地域視察
＜社会・地域の理解＞



4日目：トンケトンケ村到着



6日目：地元の高校訪問
＜地域の教育・文化交流＞



7日目：マングローブ植林体験
＜環境・エコツーリズム＞



8日目：スンピラン島訪問
＜環境・教育＞



9日目：学生企画Farewell party
＜文化交流＞



学生レポートより



■ グローバルな視野の拡大、課題認識

- ・ 実際に海外へ行くことは、映像を観たり、情報を聞いたりするのは全く異なり、とても刺激的な経験だった。そして、もつというんな地域や国に行ってみて様々な経験を積みみたい
 - ・ 欧米での留学やインターンシップにしか目を向けてなかったが、東南アジアにも興味をもった
 - ・ 離島に住む子供達の教育問題・ムスリムの女性に対する医療・食文化やごみ処理問題への疑問・興味など
- 異文化への理解
- ・ 当初の私はイスラム教徒の人々の気持ちは絶対に理解できないと考えていた。しかし、現地の学生や村の人々との交流を深めていくうちに彼らの宗教を尊敬するようになった。また、自分の宗教に關して何も答えられない自分が恥ずかしくなった
 - ・ 研修ではイスラム文化への理解を深めました。またインドネシア国内、今回の経験ではスラウェシ島だけでも地域ごとに様々な文化があることを実感した

アジア・フィールドワークコース

主な学修成果：

- ・ 異文化理解（イスラム、海洋に深く関わる文化・生活）を含むグローバルな視野の広がり
- ・ 課題発見能力の基礎の習得
- ・ 国際コミュニケーション能力の伸長
- ・ プレゼンテーション能力の伸長
- ・ 実践型グローバル人材として成長するための基盤となる3つの能力「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」の伸長

④法学部（発表者：齋藤 彰 教授（法学部））

（発表内容）

【コース名】

Lawyering in Asia コース

【学外学修活動先・期間】

マレーシア／H28.8.15～9.25

【参加学生数】

4名

【目的】

- 学部生と法科大学院生等との交流を促進し、学部生にも国際ビジネスに関する法律業務に触れる機会を与えるとともに、マレーシアを中心とした ASEAN 諸国への理解を深めることを目的として、すでに法科大学院生を対象として実施している法律事務所へのインターンシップ派遣の対象を学部1～2年生に広げて神戸 GCP として実施した。

【実施内容】

- 学部生は法律知識などの基礎知識が不足する部分があることから、事前学修の一環として「ASEANの法と社会概論」という科目を開講し、イスラム法とその金融取引に関する講義などを実施した。
- マレーシアの法律事務所を学生の受入先とし、事務所で提供される見学会やオリエンテーション等を受けて現地での生活や業務内容等について理解したのち、法律事務所が提供するトレーニングプログラムやソーシャルイベントに参加した。
- 法科大学院修了生の1人がタイへの短期旅行のあとに再入国を拒否されそうになるトラブルがあり、その影響を受けて参加学生の一部の活動が制限される面があった。急遽ビザが必要になるなど近年は入国管理が厳しくなっており、今回生じたトラブル対応は学生にとってはいい経験になった面もある。
- 滞在中、マレーシア国立大学で、本学経済学部と法学部の3、4年生が英語によりプレゼンテーションを行う機会に神戸 GCP 参加学生も一緒に参加し、交流する機会を設定した。

【成果・課題】

- 個人によって考え方、捉え方は違うが、参加した学生からは本プログラムを通じて多くの学びや成長が見られた。なお、学生に費やすべき時間が事務作業に追われて少なくなる点については本プログラムの課題と思われる。

(質疑応答)

*インターンシップについて

○法科大学院生も参加したとのことだが、本コースには他大学の学生もいたのか？

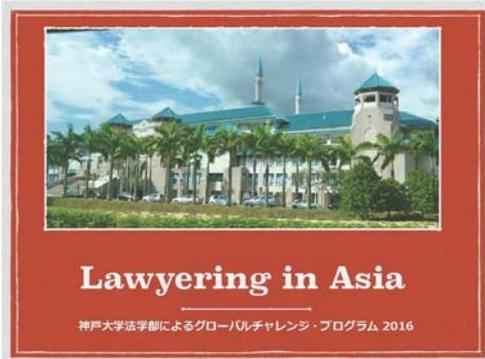
●神戸大学の学生のみである。なお、インターンシップ先の事務所では日本の他大学の学生を受け入れたこともあった。

○法律事務所へのインターンシップ派遣を2009年から実施しており、今回は対象を学部1～2年生に広げて神戸GCPに参加したとのことだが、対象を広げることで見えた効果はあったか？

●1～2年生でも予想以上に活動ができ、楽しんで業務を行っていたようである。思い切って対象を広げることに意味はあったと思われる。

(参考) 発表資料

※配付資料のうち一部を省略して掲載

 <p>Lawyering in Asia 神戸大学法学部によるグローバルチャレンジ・プログラム 2016</p>	<h3>プログラムの目的</h3> <ul style="list-style-type: none">□ 国際ビジネスに関する法律業務に触れる機会を与える。□ 学部生と法科大学院生等との交流を促進する。□ マレーシアを中心に、ASEAN諸国への理解を深める。□ そのために約40日間の海外滞在期間を確保する。
<h3>プログラム内容の設定</h3> <ul style="list-style-type: none">□ アジアにおける法文化や法制度の基礎知識を得た上で、法学研究科大学院生がインターンシップ生としてアジアの法律事務所に滞在する時期に合わせて、学部生をインターンとして派遣する。□ 法律知識等が不足する部分は、受入先事務所の弁護士の指導を受けると同時に、大学院生から日本語で助言を受けることを可能とする。滞在先の宿舎は、大学院生など世代が異なる学生がシェアすることで、交流が深まるように配慮する。	<ul style="list-style-type: none">□ 提携関係のある各国の優れた法律事務所が学生の受入先となる。参加学生は、事務所提供される見学会やオリエンテーション等を受けて現地での生活や業務内容について理解する。また、インターンシップの期間を通じて、法律事務所が提供するトレーニングプログラムやソーシャルイベントに積極的に参加する。□ 日常的には、法律事務所が担当する日系企業関係の業務に随時参加し、また会議での通訳や文書の翻訳など、実務に参加する機会を可能な限り増やす。また日系企業等を訪問して情報を収集する機会を設定する。□ 法律業務の内容に関しては、大学院生のインターン等と協力して作業を担当し、その過程を通じて法的な知識等を身につけるようにする。□ 現地法律事務所勤務する若手法律家や他国からのインターンと交流する機会を設定する。□ 週末等を活用して、近隣のアジア諸国を訪問する小旅行を自主企画し、見聞を広める。

「ASEANの法と社会概論」

- 日本との経済社会的な連携が深まるASEANの状況を伝えるための啓発を目的とした科目
- グローバルチャレンジ参加学生に基礎知識を与えるために作った1単位科目
- 法学部の下位年次の学生にも履修を認めた。
- 複数の教員・海外からの留学生・日本人学生の留学等の経験者の協力によって実施された。

講義内容の一例

3. 授業の概要と計画

開講日	時間	テーマ	担当者
5/7	1	ガイダンス/東南アジア・ASEAN概論	小野
	2	中央アジア概論	渋谷先生
	3	アジアと西洋近代法——マレーシアを例に	小野
	4	アジアと国際政治	未定
5/14	1	アジア・ビジネス	斎藤先生
	2	アジア・ビジネスローⅠ	斎藤先生
	3	アジア・ビジネスローⅡ——国際商事仲裁を中心に	Claxton 先生
	4	学生の留学・インターンシップ体験談/まとめ	小野

- ・5/7及び14の1～3限は、教員(60分)＋留学生スピーチ(30分)で行ないます。
- ・14の4限は、留学・インターンシップ経験者(3～4名)のスピーチで行ないます。



イスラム法とその金融取引について

アジア・ビジネス法1

May 14, 2016



本プログラムに関して生じた危機対応

危機管理の考え方

- 教員・事務職員を含めたコミュニケーションの多角化とネットワーク化によって危機に対応できる体制を日頃から作る。
- 学生が緊急時に助けを求めることができる人を複数もつことができるよう配慮する。
- 医療等への具体的なアクセスについてしっかりとした知識を与える。
- 社会環境の違いや状況の変化について正確な情報を与える。

実際に生じたトラブル

- 法科大学院修生の一人がタイへの短期旅行の後にマレーシアへの再入国を拒否されそうになった。
- この不測の事態によって、今回のプログラム中止が検討された。
- 不法就労が疑われる発言がなされ別室で取り調べが行われたが、受入事務所のサポートで事なきを得た。
- しかし、その後のマレーシア入管の対応を確認するために8月15日出発のインターン生は、しばらく事務所に長時間いることができなかった状況となった。

トラブルへの対応

- 8月7日の発題発時には、1週間後の8月18日に出発が確定し、全ての手配が完了していた。
- マレーシア受け入れ事務所との綿密な打合せと入国に際して生じる問題への対応
- 事務所側は全学生についてビザを申請する方向で対応することを決める
- ビザの種類とその手続に関するマレーシア入国管理局側の混乱
- 出発前日に、入国に際して生じる問題についての参加学生全員に対する詳細な説明と対応方法についての指示
- 日本語で対応できる緊急連絡先の確保（神戸大学マレーシア同窓会長に依頼）
- インターンシップの内容に変更があり得ることについての付加的な説明とビザ申請費用追加の可能性に関する連絡

インターン中の神戸大学によるイベントへの参加

マレーシア国立大学法学部での行事

- 法経連携専門教育（Econo Legal Educational Program）の登録学生がマレーシア国立大学法学部で、英語による成果発表を行う企画に、GCPの学生も一緒に参加する機会を設定した。



UKMでの行事に参加者の感想

- 現地の同年代の学生と交流するのはとても楽しく、伝統楽器を体験したり、SNS等を通じて個人的にもつながりができ、とても良い機会であった。また、マレーシア大学の学生のプレゼン能力の高さにも驚いた。
- 発表の際、マレーシアの学生は質問に自身の発表原稿から答えていたが、日本の学生は自身で考えようとして詰まっていたように感じた。それは学力の差というよりは英語運用能力の差なのではないかと思う。
- 現地の学生と交流することができてとても楽しかった。とても温かく歓迎してもらい、会話も弾んだ。やはり、学生同士の力が距離感を取りやすいと思った。彼らも英語は第二言語であるはずなのに、日本人よりも喋りやすそうに感じることに驚いた。
- まず、海外の学生のプレゼンとうまさにも驚いた。また、法経連携プログラムの存在を知れて、そのプログラムに参加している先輩と仲良くなって、意見を交換していくことができた。

Lawyering in Asiaに参加した学生の感想 2017年1月現在

このプログラムで苦労したこと

- 日本語を母語とする方と比べて、自身の英語力が足りておらず、コミュニケーションに満足は出来なかった。あとから思えば短期英語研修のリスニングと違い、マレーシア人の母国語で話すことが出来ない上に、自分の英語も相手と聞き取ってもらえないのが大きかったと思う。あと、詳細なスケジュールには現地に行くことに伴ってあったため、かなり厳しかった。
- 弁護士や経営者の方々との関わり、ロースクール生の方も含めて多くの人と日本人と一緒にいたので、その中で英語が多くなってしまったり傾向があった。日本人全員が一室にまとめたことにも原因があると思う。
- 英語では法律の説明を聞くこと、事前にシジュメ確認されていたので、知らない単語も出てくることでしたが、それでも話についていくのが大変だった。質問を強く出されるので、どんな質問をしようか考えながら聞く必要があり、余計に大変だった。特に込み入った質問はできないので、わかる範囲で質問するしかなく、黒板だと用紙を使っているのかなあと思うようになった。
- 自分の個性を振り払うこと。会議費などを負担していただく機会があったのだが、全部負担は出来ず、モチベーションも下がった。弁護士の仕事はこのような文章を作成することも含むのかと思うと、なんだか気が重かった。弁護士も少し変わったような気がした。

このプログラムで楽しかったこと

- 東南アジアという全く日本と異なる場の食事や景観、慣習といった異文化体験。
- 外国の法律事務所で実際に働く方々やマレーシア大学の学生とコミュニケーションをとることを通じて、思想や感覚の違い等も感じられたこと。
- 裁判所や国立銀行に見学しに行ったこと。
- 職場で仲良くなった人とバーや焼肉店などに連れて行ってもらうこと。
- クアラルンプールの街で生活できたこと。知らない街で40日も過ごすことはとても刺激的でワクワクした。同級生、ロースクール生との共同生活だったのも良い経験になったと思う。独りであるまたは家族といる自分(完全にリラックスした状態)と他の人と接する自分(ある程度の体教を課せようとする状態)の違いがよくわかった。
- タイに旅行に行ったのも楽しかった。

このプログラムから特に学んだこと 法律実務に関して

- 法律家のデスクワークの重要性を知った。依頼人とコミュニケーションをとる能力も必要で、かつ、文書作成能力も。それぞれ弁護士が専門に分かれていて、協力して仕事をやるようだ。例えば企業の実務の場合、corporate 担当の弁護士と property 担当の弁護士が協働するなどである。法律家というだけで専門的であるイメージであるが、より細かく細かく分かれていると知った。それだけ法律は膨大なものだろう。想像以上に地道で根気のいる仕事だと思った。
- 弁護士事務所に入ると職種が専門化されていることを学んだ。自分が入学前に聞いていた弁護士職とはかなり異なるものであり、自分の理想の弁護士はほぼ少く「復讐」だと強く感じた。
- チューデントと言った会社の両面について調べていく作業をしたが、日本では弁護士自身が行わない作業も現場では行っているのを知れた。
- マレーシアではムスリムを含む多民族国家として、シャリーアを適用するなど日本と異なる裁判制度が確立されていること。

このプログラムから特に学んだこと 海外体験として

- マレーシアというイスラム教国の文化を知れて、マレー人、中国人、インド人などによる様々な文化を知れたのは非常に良い体験となった。
- 東南アジアの国としての食や都市の雰囲気の違いを感じるだけでなく、マレー系ムスリムや中華系、インド系といった様々な民族の人々が「マレーシア人」として共通のアイデンティティをもつて、入り混じって生活しているのが興味深かった。また、マレーシア語が公用語ではあるが英語が生活に活用している点も印象深かった。
- イスラムの文化に多く触れることができ、イスラムに対して良いイメージを持つことができた。特にモスクや清真堂などの美しさに魅了された。
- お金がそれほど必要としないことを改めて知った。マレーシアにも日本と同じようにショッピングモールがあるし、遊園地もある。ただ、銭湯がないのは辛いと思った。
- 日本に比べて外国人が五月蝋いと感じていたため、自分がそう思われないよう細心の注意を払った。

特に自分が成長したと思う点

- 様々なことに挑戦することへの恐れが和らいでネットワークが軽くなった。
- 東南アジアの国に行くことに抵抗がなくなったこと。それまで先進国ではないという理由であまり興味を持っていなかったが(ニュースなどで流れる情報が欧米に偏っていることも原因だろう)、アジアの国の活気というものを感ずることができ、先入観を変えることができた。
- 担当の弁護士の方と一対一で話すときなど、他人に頼らずに自分でなんとかコミュニケーションをとる努力を行ったことで、多少は海外活動に対する自信が持てたし、課題解決能力が備わったと思う。
- 多少なりとも人間的に成長できた。

約40日という期間設定についての感想

- しっかり海外で生活したという感覚を得られる点でいいと思う。ただ、いきなり海外でインターン40日というのを聞いて参加するのは勇気がいるし、実際にも全く出来る気がせず、不安だった。ある程度、出来るイメージが持てないとモチベーションを上げるのも難しいと思う。
- 40日という限られた期間の中で、事務所においても観光においても自分で計画を立てて有効活用できれば十分であり、適当な期間設定であったと思う。
- ちょうど良いくらいの期間だった。
- 中途半端だと感じた。「外国の空気を味わう」といった目的なら長い、「英語運用能力をあげよう」という目的なら短すぎると思う。

特に印象に残ったこと (自由記述)

- 初めての海外経験となったので様々なことが新鮮で毎日が驚きの連続だった。参加してよかった。
- 東南アジアへの留学、法律事務所へのインターンシップ、大学訪問といった要素に加えて、印象的であったポイントが「大学院生との共同生活」であった。学生にとって院生と交流する機会はないが、法曹を目指し司法試験に一番近い先輩方と様々なお話をし、将来を考える上で大変役立つ上、貴重な人脈ができたと思う。
- また、公用語がマレーシア語であるにもかかわらずほとんどの人が英語を話せることに、危機感を覚えたし、マレーシアでの英語教育がどのようなものであるかについて、興味があった。
- マレーシアが話すことの出来ない仕事現場の中年男性と海外とコミュニケーションが取れた。世界の果てまでイッパチで英語の全く話せない出川哲朗がアメリカに行きコミュニケーションを取れているのはヤラセだと思っていたが、実際に身振り手振りでも通じることを体験し驚いた。

【結語】コーディネータと実感 特に全学によるプログラム運営に対して

- 教員の負担を顧みない、過剰なペーパーワーク及び会議など大学の外観的な成果を見せるために教員と学生とが右往左往されることが多すぎた。教育現場への関心と配慮の薄さに驚いた。
- 教育の成果は学生1人1人の成長にしか見えないという大切なことが忘れられた全学のプログラム運営であった。結果として、教員が学生の成長に向けた指導を行うための時間と余力を奪われた。
- 「学生が新たな能力を獲得する」ことをアシストするというプログラム本来の目的が忘れ去られ、「大学が何かをやる」ことを焦りすぎた全体運営に対して深刻な危機感を感ずる。

⑤理学部（発表者：鏑木 基成 教授（理学部））

（発表内容）

【コース名】

①理学 UPLB コース ②理学 Tsinghua コース ③理学 Nanyang コース

【学外学修活動先・期間】 ※各コースは29年度より実施

- ①フィリピン・フィリピン大学ロスバニョス校(UPLB) / 3週間程度
- ②中国・清華大学生命科学学院（北京） / 2～3週間程度
- ③シンガポール・南洋理工大学理学部 / 2～3週間程度

【目的】

- 平成29年度より、「サイエンスにおける異文化・異分野の理解と文理融合」をテーマとして、3つのプログラムコースを実施する。

【実施内容】

- 「理学 UPLB コース」は、英語研修に重点をおいた海外学修プログラムである。フィリピン大学ロスバニョス校(UPLB・フィリピン)にて提供される3週間の英語語学研修に参加する。
- 「理学 Tsinghua コース」及び「理学 Nanyang コース」は、サイエンスを基本として異文化・異分野の理解に重点をおいた、ともに学生企画型の海外学修プログラムである。「理学 Tsinghua コース」は清華大学生命科学学院にて、また「理学 Nanyang コース」は南洋理工大学理学部にて、それぞれ2～3週間程度のプログラムを企画・実施する。
- 平成29年度からのプログラム実施に向けて、大学間協定締結大学を海外研修先として準備を進めてきた。理学研究科ホームページに「理学グローバルチャレンジプログラム」のページを開設するなどの取組を進めているところである。

（質疑応答）

*テーマ設定

- 学生企画型のコースとは、学生が研究テーマを持って派遣先で研究等を行うということか？
- 1～2年生の学生が、現地で自身の研究テーマに基づき研究を行うことは難しい。本学の教員が仲介となって現地の受入教員と学生で相談し、2～3週間で行えるテーマを決めて派遣する予定である。

⑥農学部（発表者：土佐 幸雄 教授（農学部））

（発表内容）

【コース名】

UPLB 農学英语コース

【学外学修活動先・期間】

フィリピン／H28.9.4～9.24

【参加学生数】

19名

【目的】

- 専門分野に関する深い知識と洞察力を持ったうえで、英語で自由にコミュニケーションを行う能力を培い、多様な価値観・考え方を尊重しながら自己表現できる国際性を兼ね備えたグローバル人材の養成を目指すことを目的としている。

【実施内容】

- UPLB 農学英语コースは、フィリピンでの英語漬けのプログラムである。フィリピン大学ロスバニョス校（UPLB）では、毎日午前から午後にかけて英語研修（Lecture）を行った。Lectureの内容は多様で、Interviewでは本学の学生が現地大学の教職員や学生に話しかけてインタビューを行った。Presentationなど人の前で話す機会が非常に多いものであった。夕方以降の Guided Interactionでは本学の学生が現地の学生とグループになって現地の生活や文化を学んだ。また、農学関連施設の訪問では世界的にも有名な IRRI（国際イネ研究所）等を訪れた。

Closing Programでは学生が英語寸劇を行った。日本人学生はシャイだと一般的に言われるが、全くそんなことはなく、活発に交流を行っていた。

【成果】

- 集中講義により、英語による表現力・プレゼン能力が飛躍的に向上した。また、UPLBの学生との交流によって、異国の文化を理解し、尊重する国際性が身についた。各機関への訪問ではアジアの農業について学び、イネ等の作物に関する知識を深めるとともに、英語で質疑応答を行うなど実践的な英語力を育成することができた。

（質疑応答）

*海外研修の内容

- プログラム参加の間、学生は現地の学生とどのような接触の機会があるか？

●毎日交流する機会がある。夕食までの Guided Interaction では現地学生1名に対し本学の学生複数名がグループとなって交流を行い、夕食後も、現地の学生が宿舎に来て1～2時間英語のレッスンを行っていた。

○理系のコースであるが、テクニカルタームを学んだり専門分野の内容を学生が理解できるようにするための工夫はあるのか？

●そのように努力している。例えば、IRRI（国際イネ研究所）には本学出身のスタッフがいたので、説明をまず日本語で行い、その後英語で説明を行うなど、英語での理解がスムーズになるよう工夫している。なお、参加学生からは、それでも専門分野の理解が難しかったので、一定程度専門分野の勉強をしてから再度参加したいとの意見もあった。

* 終了後の認定証

○派遣終了後に何か認定証等もらえるのか？

●特に認定証等はない。英語能力については、派遣開始時と終了時にテストを行い、その結果について、派遣先の大学から評価を行ってもらっている。

(参考) 発表資料





⑦工学部（発表者：石田 謙司 教授（工学部））

（発表内容）

【コース名】

ギャップターム海外協定校派遣コース

【学外学修活動先・期間】

リンショピン大学（スウェーデン）／平成29年度派遣予定

【参加学生数】

12名（28年度より事前学修中）

【目的】

- 英語コミュニケーション力や、英語による工学知識を習得可能とする能力の向上を図るとともに、国内外のインターンシップ等及び協定校での体験を通して、日本の、ひいては各自の進むべき方向性を見出し、広い視野を獲得することを目的とする。

【取組内容】

- 平成28年度は、学生の募集、選抜を行ったのち、事前学修を開始し「工学英語入門」を開講した。あわせて、学生受入先の開拓・調査を進めた結果、平成29年度のリンショピン大学（スウェーデン）のほか、国立台湾大学（台湾・平成30年度）、ロイヤルメルボルン工科大学（オーストラリア・平成31年度）が派遣先として決定した。リンショピン大学では、約1週間滞在して研修先大学の施設の見学・セミナーの受講などを行う予定である。また、グローバル企業研修についても受入企業の開拓・調査を進めた。グローバル企業では、語学力の必要性に加え、世界的視野の獲得、資材・人材・市場の国際化、異文化理解などの必要性を、現場の声から学修する予定である。

【成果】

- 平成28年度に行った「工学英語入門」では、外国人講師から数学、物理、化学に関する基本的な内容の英語講義を受講することで、簡単な工学英語を理解、修得することができた。

（質疑応答）

*クォーター制とギャップターム

○ギャップタームを利用するとのことだが、第1クォーターに事前学修を行い、第2クォーターの海外派遣期間には夏休みも含めるということか？

- そのとおりである。

(参考) 発表資料

神戸大学 工学部

工学部では「ギャップターム海外協定校派遣コース」として、外国人講師による英語講義や演習等による事前学修プログラムを実施し、2017年2Q(ギャップターム)に海外研修、国内グローバル企業研修、事後学修等を実施予定です。

2016年度 活動内容

- (1) 募集ガイダンスと選抜
- (2) 「工学英語入門」の開講
- (3) 海外研究先の探索と調整
- (4) グローバル企業研修先の探索



「神戸GCP 工学部」の概要

2016年 (1年生)	1-1Q	募集ガイダンス
	1-2Q	英語外部試験(TOIEC-IP)
	1-3Q	各学科2名程度の候補学生の募集、選抜
	1-4Q	
		事前学習(工学英語入門:15コマ) <small>工学部科目「工学英語入門」 (2単位、その他必要と認める科目)</small>
2017年 (2年生)	2-1Q	事前学習(演習1:7.5コマ)
	2-2Q	事後学修(演習2)

総合教養科目「グローバルチャレンジ実習」

申込み・審査スケジュール

- (1) 神戸GCP工学部 募集ガイダンス(4/22)
- (2) 英語外部試験(5/14)の受験
- (3) 神戸GCP工学部の募集
期間: 5/23~ 6/30
人数: 各学科2名程度
選抜: 英語外部試験の成績、小論文、面接ほか
- (4) 書類審査の結果発表、面接者の決定(7/13)
- (5) 面接試験(7/25)
- (6) 候補者の決定、ガイダンス

「神戸GCP 工学部」募集ガイダンスと審査

【GCPガイダンス】 4月22日
参加者: **37名**

スケジュール:

- (1) 神戸GCP全体像の説明
- (2) 工学部プログラムの説明
- (3) 質疑応答

【応募状況と採択者】

建築学科:4名、市民工学科:4名、機械工学科:2名、
電気電子工学科:3名、応用化学科:6名、情報知能工学科:7名

・**応募者:28名**
・各学科にて英語外部試験の成績、小論文、面接等による選抜

→ **12名を選抜**



事前学習(1-3Q,4Qの事前学習)

科目名: **工学英語入門** (2単位)
(Introduction to English Communication for Engineering)



神戸GCPの事前学修の一環として、外国人非常勤講師から、**数学、物理、化学に関する基本的な内容の英語講義を受講**することで、簡単な工学英語を理解、修得する。

対象学部・学年: 神戸GCP工学部の候補者
開講日: 2016年後期(セメスター開講 15コマ) 金曜5限目
担当者: 非常勤講師 Mark J Norton氏

海外研修先の探索

研修先候補

- ・リンショピン大学(スウェーデン)
- ・国立台湾大学(台湾)
- ・ロイヤルメルボルン工科大学(オーストラリア)
- ・ニューサウスウェールズ工科大学(オーストラリア)

これら海外研修先と
現地で意見交換、議論した



派遣校決定
平成29年度 リンショピン大学
平成30年度 国立台湾大学
平成31年度 ロイヤルメルボルン工科大学

H29 海外研修、グローバル企業研修(2-2Q)

(1) 海外研修

研修先: リンショピン大学(スウェーデン)

約1週間滞在して研修先大学の施設の見学
セミナーの受講などを行います。



(2) グローバル企業研修

研修先: パナソニック、三菱電機、日建設計
三菱星ベルト、東水環境センター

グローバル企業において、語学力の必要性に加え、
世界的視野の獲得、資材・人材・市場の国際化、異文化
理解などの必要性を、現場の声から学修する。



神戸GCP工学部 :ギャップターム海外協定派遣コース

【平成29年度 予定スケジュール】

- (1) 2-1Q(事前学習)**
 - ・危機管理
 - ・グローバル企業調査、留学先調査、
 - ・チャレンジシート作成
- (2) 2-2Q~夏季休暇**
 - ・グローバル企業研修
 - ・海外研修
- (3) 2-2Q(事後学習)**
 - ・学外研修のまとめ、リフレクションシート作成
 - ・工学部内発表会(総括プレゼンテーション)

+ 「H29年度学生向けの神戸GCP工学部のスタート」



⑧国際教育総合センター（発表者：高城 宏行 特命准教授（国際教育総合センター））

（発表内容）

【コース名】

EUフィールドワークコース

【学外学修活動先・期間】

ドイツ、ベルギー、フランス、日本/H29.2.23～3.5 ほか（参加学生・派遣先による）

【参加学生数】

7名

【目的】

- 「日欧比較」をテーマに、学生自らが企画・実施することで日欧が抱える共通課題を深く知ること、及び現地に赴くことでその解決に向けた方策を思考する能力を学生に身に付けさせることを目的とする。

【実施内容】

- 本コースは、神戸大学 EU エキスパート人材養成プログラム（以下「KUPES」という。）の履修生を対象としたコースである。KUPES とは、学部2年生～博士前期課程2年生までの5年一貫プログラムであり、国際文化・法・経済の3学部・研究科からそれぞれ7名程度、年に約20名程度を募集している。KUPES 履修生は全員3年生後期から1学期～1年間ヨーロッパに留学することとしている。
- KUPES の必須科目として「日欧比較セミナー」というオムニバス形式の英語による授業を行っており、欧州からの交換留学生にも参加してもらっている。そこでトピック毎にディスカッション等を行い、各トピックの中で学生が関心を持ったものについて、神戸GCPとして現地でフィールドワークを行うこととしている。
- 参加する7名の学生は、事前学修として1～2週間に1回、全員又はテーマに合わせてグループで集まりフィールドワークの計画を立て、その内容を授業の1コマを使って発表し、教員等からの指摘を受けて再度フィールドワークの計画を練り直した。訪問先のアポイントメントも学生が自らとることとしている。経済学部の学生が多いが、同学部では手厚い奨学金補助があったことも理由の一つかと思われる。

【成果】

- 近日中に開始する学外学修活動は、参加学生ごとに派遣先・日程が異なる。治安の問題があるため、現地では2人でペアになって行動することとなる。参加する学生のモチベーションは高く、3年生後期からの留学につながる成長と飛躍が期待される。

(質疑応答)

* 現地での行動

- (資料に記載されている) 学生Fは1人で行動するのか?
- 学生Fは他のプログラム参加者とドイツに行く予定であり、現地では1人で行動するわけではない。

(参考) 発表資料



Kobe Global Challenge Program

Kobe University Programme for European Studies
(KUPES)

KUPES fieldwork in the EU

20 February 2017

神戸大学

コースの概要

- planning fieldwork with the theme relating to the EU and Japan
- working in a team and as an individual
- doing fieldwork in Europe and/or Japan
- evaluating and reflecting outcomes

神戸大学

コース スケジュール

1) planning fieldwork (Oct 2016-Feb 2017)

- selecting research theme, topic and methodology
- formulating research questions
- literature review
- making appointments and a schedule for fieldwork
- setting learning objectives

2) going into the field (Feb-Mar 2017)

3) evaluating learning outcomes (Mar 2017)

神戸大学

フィールドワークのテーマ

学部	学生	テーマ
1	国文 A	high-skilled labour mobility and migration
	経済 B	
	経済 C	
	経済 D	
2	経済 E	effect and integration of immigrants and refugees
	法 F	
3	経済 G	trade in genetically-modified products (crops)

神戸大学

フィールドワーク先

	A	B	C	G	D	E	F
Day1							Tokyo (Day1-2)
Day2							
Day3	Germany		France				
Day4							
Day5							
Day6/1	Belgium						
Day7/2	- European Parliament and EU institutions						
Day8/3	- Partner universities (KUL VUB and Gent)						
Day4							
Day5							France
Day6							
Day7							Germany
Day8							Germany (Day3-8)

神戸大学

事前学修の様子(グループワーク・活動計画発表会)



⑨大学教育研究推進室（発表者：法学部1年生，文学部1年生）

（発表内容）（※大学教育研究推進室で実施した複数のコースを代表して学生より発表）

【コース名】

インターンシップチャレンジコース

【学外学修活動先・期間】

ミャンマー・ヤンゴン／H28.9.3～9.25

【参加学生数】

3名

【目的】

- インターンシップを通じた異文化交流を目的として実施した。

【実施内容】

- ティン・ミャンマー・ランゲージセンター（日本語学校）で活動した。同センターでは、現地に滞在している日本人に対するミャンマー語の授業も行っており、カタカナの振り仮名やアクセントの改訂など、ミャンマー語テキストの編集補助を行った。また、日本語を学んでいる学生に対して、各自でテーマを決めて1人7～8分のプレゼンテーションを実施したほか、日本語文法授業の見学や会話の授業に参加した。日本語学校のほかにも、現地の企業やOBOGを訪問した。

【振り返り】

- 現地の企業を訪問し、日本人でありながらミャンマーの文化を理解しようと生活習慣に適応し活躍している姿を見て、相互的な理解と前向きに学び理解しようとする気持ちが大切だと気づいた。その姿勢を心がけることで現地での生活に適応することができ、それが自信になり、また海外に出てみたいという気持ちも大きくなった。
- 現地では学生と交流する機会も多かったが、想像以上にさまざまな事情があり多様性を実感した。日本人としての自分の常識は通用せず、これまで当たり前だと思っていたことがそうではなく、いかに自分が不自由のない環境にいたかを実感した。日本で仕事をするときには気をつけることや日本でお坊さんになるにはどうすればよいかを質問されたが、うまく答えられず、日本のことについても理解できていないのだと気づかされた。
- 表面的に共通の言語を話すだけでなく、前提としての理解する姿勢が大切である。異なる文化背景をもつ相手をそのまま受け入れる姿勢と、滞在中にミャンマーの方が自分にしてくれたように当たり前に親切にすることを普段の生活でも実践していきたい。

(質疑応答)

*事前学修

- 事前学修として何を行ったか？また、グループ単位と個別のどちらで行ったか？
- ◎参加者全員で、ミャンマーの基本情報や危機管理について学んだ。また、個々でも興味のあることを調べるなどした。

*参加理由

- 神戸 GCP に参加したきっかけは何か？また参加して、上手くいったこととそうでなかったことを踏まえ、今後どのような活動がしたいと思ったか？また学修のモチベーションが変わったなどの変化はあったか？
- ◎元々仏教に興味があったので、仏教圏の国に行ってみようと思った。プログラムに参加して、仏教についてさらに学んでいきたいと感じている。
- ◎異文化交流をしたいと思って参加した。日本語学修を行うセンターへのインターンシップなので、話す機会がたくさんありそうだと感じ、このコースに参加した。また、インターンシップ先では基本的に日本語で話すよう指示があったが、仲良くなってくると英語での交流も増えた。派遣前は、他の人に比べれば英語での会話ができる方だと思っていたが、実際に交流すると思うように話せないと感じたり、もっと伝えたい内容があるのにと感じたりすることがあった。もっと頑張るって英語を勉強しようと感じた。

(参考) 発表資料

	<h3>概要</h3> <ul style="list-style-type: none">▶ 期 間 : 2016年9月3日～9月25日▶ 滞 在 先 : ティン・ミャンマー・ランゲージセンター(ヤンゴン)▶ 目 的 : インターンシップを通じた異文化交流▶ 人 数 : 学生4名 
<h3>テキスト編集作業</h3> <ul style="list-style-type: none">▶ ミャンマー語テキスト編集補助▶ カタカナの振り仮名、アクセントの改訂▶ 本全体の構成▶ 各章の順序の見直し案作成 	<h3>日本文化紹介</h3> <ul style="list-style-type: none">▶ 日本文化紹介▶ プレゼンテーションの実施 

日本語授業見学および指導補助

- ▶ 日本語文法授業の見学
- ▶ 会話の授業への参加



企業訪問・OBOG訪問



日本大使館



学生交流



日本語学校の学生と

日本語学校の学生と



多様性

商業学校で



振り返り

- ▶ 表面的に共通の言語を話すだけでなく、前提としての理解する姿勢
- ▶ 現地の生活に適応すること



2-5. プログラム全体についての質疑応答・意見交換

(1) 業務分担と統一化について

○プログラムの実施には多くの教職員の労力が必要となる。参加学生が増加するとさらに多くの労力が必要となってくるが、業務分担（部局での業務と神戸 GCP 全体の業務の区分）やリソースの共有はどのようになっているか？

●神戸 GCP における危機管理学修は大学教育研究推進室（以下「推進室」という。）が統括して実施している。また、希望者対象の英語レッスンも、各部局の取組以外にも推進室で行っている。他に FD 等も全学でまとめて行っている。

○プログラムの参加学生は年間 100 人程度とさほど規模は大きくないが、プログラム数は多い。効率性について考えることは重要だと思う。例えば立命館大学では、短期研修を含めると 1,700 人程度の学生が留学しているため、学生の諸手続きをアウトソーシングし、教職員はプログラムの企画・立案に集中する方向で検討を始めている。

●危機管理学修のうち一部は OSSMA に委託し、足りない部分について推進室が行うなどの工夫は行っている。

○神戸大学では短期研修等を含めて、年間どれくらいの学生を海外派遣しているか？

●本学の海外派遣学生数は年間 800 名ほどである。なお、交換留学については、全学協定に基づく留学に関しては事前研修を含め本部がまとめて対応しているが、部局間協定に基づく留学については各部局で対応しており、グローバル・エクセレント・プログラムについても部局が管理している。その他、OSSMA による危機管理学修等は全学で統一して行っている。神戸 GCP 等、複数の部局が関与するプログラムが今後増える可能性もあり、どのように学内での共通基盤を構築していくかが今後の課題である。

(2) クォーター制とギャップイヤーについて

○神戸大学のクォーター制及びギャップイヤーの設定に対し、神戸 GCP はどのように位置づけられているか？ギャップイヤーの活用を促進するため、神戸 GCP での派遣期間の長期化を検討しているか？

●今のところ、1クォーター期間に他の授業を履修せずに参加させるような、ギャップタームを実際に活用した神戸 GCP のコースは存在していない。なお、ギャップタームの活用促進については、特に理系学部において、あるクォーター期間では必修科目の配置が 0 となるように検討を進めている。また、クォーター末の試験期間とプログラム派遣期間の重複について、試験日変更等の配慮をお願いする予定である。

○クォーター制の導入まで大変なプロセスがあったと思うが、実際に導入して課題に感じることは何か？

- 導入に当たって大きな課題にぶつかったことは特になかった。ただし、導入後、授業形態や内容が、まだクォーター制に対応できていないのが現状である。例えば全ての科目がクォーター開講になったわけではなく、またクォーター開講の場合でも週2回開講の科目もあれば、週1回開講で単位数が半分になった科目もある。どのような授業形態、授業体系とすればクォーター制がよりよいものとなるか、今後の検討課題である。

(3) コースの複数回参加について

- 学部1年生で神戸GCPに参加した学生が、2年生で再度神戸GCPの別コースに参加する可能性はあるか？
- コース内容が異なれば、再度神戸GCPに参加することは可能であり、履修も行えるように制度設計している。リピーターが出たとしても、本プログラムはある程度大きな規模であるため、他の参加希望者を排除することにはならないと思っている。
- 学生の方は、再度神戸GCPに参加したいと思うか？
- ◎次年度は3年生になるため、神戸GCPに再度参加することはできないが、可能であれば参加したいと感じる。なお、参加に当たっては経済的な障壁もあると思うが、アルバイトやサークル活動のため、夏休みに2～3週間確保することが難しいと感じる。
- ◎神戸GCPに参加して、他の国にも行きたいと感じ、それが学修のモチベーションにつながっている。神戸GCPではなく他のプログラムでも良いので参加できたら良いと思っている。
- ◎所属学部では開設されている海外派遣プログラムが少ないので、できれば次年度も参加したい。
- 神戸GCPに関しては学生への経済支援も行われており、限られた学生が複数回参加することは、学生への公平なチャンスの提供という点から、問題になる可能性がある。文科省から補助金が出ているプログラムなので、税金使用の点からも公平性が問題になるかもしれない。

(4) 学生の海外体験について

- 神戸GCP参加以前に、観光以外の目的で海外へ行ったことはあったか？
- ◎高校生のときに語学学修で2週間イギリスに行ったことがあった。ただし、発展途上国に行ったことがなく、興味があったので神戸GCPに参加した。
- ◎観光以外は特になかった。(2名)
- ◎都道府県のプログラムで、高校生のときに2週間イギリスに行ったことがあった。
- ◎海外に行ったことがなかった。

(5) プログラムの波及効果と派遣地域について

- プログラムに参加して得られた気づきを、他の学生に伝えるなどしたか？
- ◎サークル内でプログラムを勧めたことがある。関心がない人の中には、「学修内容・時間の割に授与される単位数が少ない」と言う人がいた。
- ◎神戸 GCP は基本的にアジアのマイナーな国への派遣が多い。マイナーな国に関心がある人にプログラムについて説明すると関心を持たれるが、誰に説明しても同じ反応というわけではない。
- ◎勧めてはいないが、神戸 GCP の存在について伝えることはした。
- ◎学部の共有 LINE にコースの参加応募についての情報が流れ、そこでプログラムの存在を知って参加した。派遣先国が、入学直後の学生がイメージする「外国」と異なっている。実際プログラムに参加すると価値観も変わり、参加してよかったと思うが、メジャーでない国へ行こうと思うかどうかは、学生がチャレンジしようと思うかどうかにかかっている。大学側が何か対処するものではないと思う。
- ◎同学年でコースに参加したのは自分 1 人であり、友人を見ても専門分野とアジアの関係に関心のある人は少なかったように感じる。ただ、1 年生向けの別のコースには多くの学生が参加したので、そこで刺激を受けてくれれば良いと感じる。
- 推進室企画のコースではアジア圏への派遣が多いが、多くの学生にとってその国のイメージがわからないようである。そのため、平成 29 年度から、「アジアへの誘い」という科目を開講し、各国の社会や文化等について授業を行う予定にしている。
- 「アジアへの誘い」は単位の授与される科目か？
- 教養教育の科目として単位が授与される。

(6) 本学留学生との交流について

- 事前学修時に、派遣先国から神戸大学に留学に来ている学生と、神戸 GCP 参加学生が交流する機会はあるのか？
- 農学部のコースでは交流の機会を設けている。その際、現地語（タガログ語）のレッスンもしてもらっている。現地語を知っていることで、派遣先での交流がスムーズになる。
- 事前学修時の留学生との交流については、積極的に進めてもよいかもしれない。

(7) 参加経費について

- プログラム参加に当たっての経済負担はどれくらいか？
- ◎国際連携産官学アドバンスコース：20 万円程度である。

- ◎インターンシップチャレンジコース（ミャンマー）：20万円程度で、そのうち5万円補助があった。
- ◎Lawyering in Asia コース：渡航費と宿泊代とで15万円程度で、そのうち7万円補助があった。それとは別に食事代等を支払った。
- 欧米では1ヶ月程度のプログラムの場合、45万円程度必要となる。ニューヨークコースについては、平成28年度は必要経費が高く参加人数が確保できなかったため、不開講となったが、平成29年度は40万円台に経費を落として募集したところ、参加者数が確保できた。
- KUPES コース：欧州は2月だと渡航費が安いので、25万円程度である。
- UPLB コース：食事代込みで20万円程度で、そのうち5万円補助があった。学生の感覚としては、15万円を切ると参加しやすくなるようである。
- アジア・フィールドワークコース：ホームステイを行い10万円程度であった。補助額を引くと7～8万円程度であった。

- プログラム参加に当たって経済負担は誰がしたか？
 - ◎親に支払ってもらった。（2名）
 - ◎基本的に親に支払ってもらい、現地で使用する小遣い等は自分で支払った。
 - ◎自分で支払えない分のみ、親に支払ってもらった。
 - ◎1年生のときにアルバイトで貯めた貯金を使用して支払った。
 - ◎1年生にとっては、参加募集が5月頃で派遣が8月～9月頃であり、入学後間もないので、アルバイトで参加費を稼ぐことは実質不可能だと感じる。

2-6. 外部評価委員の講評

塩川委員

- どの大学においても、短期海外派遣プログラムにおいては「学びの動機づけ」を目的としていることが多い。多くの場合、渡航中は学生の学修へのモチベーションが高まるが、課題なのはそのモチベーションを帰国後どう維持させ、得られた気づきを日常に落とし込むかである。派遣での成果をどう日常に落とし込むかという点で言えば、他の学生への波及効果も課題といえる。また神戸 GCP では、同じコースに様々な学部の学生が参加し、時には3~4年生や大学院生も参加している。そこから学生が学んでいる部分は多いと思う。事前学修・事後学修をどのように行うかがポイントになると思われる。
- 近年は学生の派遣先としてアジアが選択されることが多い。アジアの学生も英語で積極的に交流しようとするので、派遣先としては良いと思う。また、神戸大学の学生のうち、1割近い学生が留学生だと思う。そのようなリソースが学内にあるので、学生に協力してもらい、国内にいながら留学の疑似体験ができるようなコースを作っても良いかもしれない。補助金終了後もプログラムの一定の維持が求められると思うが、国内のコース開発についてはまだ余地があるのではないか？

杉本委員

- これまで日本の大学は短期交流プログラムを作っても海外の大学の学期制と合わないという事情があった。神戸大学のクォーター制が神戸 GCP にて積極的に活用されているのは良い点だと感じる。
- 1~2年生を対象とするプログラムであるのは良い点だと感じる。学部1~2年生の学生は、自分の中で準備が整っていないことを理由に海外渡航をためらうことが多い。「まず行ってみる」という姿勢で参加できることは良いと思う。
- 全学で取組を行っている点が良いと感じる。全学で取組内容や業務をまとめつつ、一辺倒にならないように今後もプログラムを進めていけたら良いと感じる。
- 単位授与されるプログラムであるが、プログラム参加には参加費が必要である。これまで、単位授与のために授業料以外に費用がかかるという状況はあまりなかった。その点からも、経済支援については一層の努力が必要だと思われる。
- 単位授与されるプログラムであるが、何に対して単位を授与しているのか、今一度検討したほうがよい。例えば3つの能力を学生は自己評価しているとのことだが、体験型の授業において成果をどのように測るかは、実際難しい問題である。また、3つの能力とは別の、思いがけない成果が仮に生じた場合、どのように成績に繋げるのかという問題もある。
- プログラムの自己評価について、もう少し体系的に行うべきではないか？自己点検・評価報告書では、多くの取組及びコースにおいて自己評価が高めだが、自己評価ではプラスの

評価を行いやすいものである。学生の評価以外にも、プログラムとして何が成果で何が課題であるか、きちんと検討すべきでないか？

堀江委員

- 学修成果について学生がルーブリックで自己評価を行うことは良いと思うが、ルーブリックの内容が抽象的に感じる。学生によって捉え方が異なる可能性があり、海外体験をしたことのない学生にとってはイメージしにくいかもしれない。また異文化理解に関しては、学生は知れば知るほど、より多くの課題があると感じるようになる。このルーブリックの場合、学生の自己成長感を測ることはできるだろうが、学生自身の枠組の中でのみの自己評価となる可能性がある。他の客観的指標や異文化環境での学びのガイドライン（異文化の中ではどういう視点を持つとより学びが深まるかなど）があると、学習者としてはやり易くなるのではないかと思う。
- 事前学修において、その国や地域の社会・文化に関するインプットは行っているようだが、人間が異なる文化に接した際、どういう心理的反応をしやすいか、また認知行動の盲点等についても学修を行うと良いと感じる。
- 事後学修で学修成果を振り返るということは、慣れていない学生にとっては難しいかもしれない。第3者にわかり易く伝えるためにはトレーニングが必要なので、その機会を設けてはどうか？このことはプログラムの宣伝効果にもつながると思う。
- 神戸 GCP では語学力よりもまずは体験を重視しており、プログラムの内容も語学が目的とならないよう工夫していると感じた。また、日本語をわかり易く伝えることもコミュニケーションの技法のひとつであり、日本語学修者との交流機会を設けることは、リソースとして適切だと感じる。それに関連して、神戸大学への留学生に教えてもらう、助けてもらう機会を設けてはどうか？留学生は基本的に助けてもらうことが多いので、助ける機会を作ることは留学生にとっても良いと感じる。また参加学生が学内での国際交流においてリーダーシップを発揮できるようになれば良いと感じる。

3. 外部評価委員による外部評価報告

外部評価報告

平成29年3月30日

元 梅光学院大学 副学長（国際交流担当） 塩川 雅美

1. 総評

- (1) 平成28年度から実施されている「2学期クォーター制」のギャップ・タームを活用するものとして、グローバル・チャレンジ・プログラム（以下「GCP」という。）を位置付けていることで、GCP以外に各学部が独自でギャップ・タームを活用したプログラム開発をするうえでの参考事例となりうる取り組みと思われる。
- (2) 1、2年生の段階での海外体験による気づきが、その後の各学部における国内・国外のプログラムへの参加意識を高め、最終的には在学期間を通じて「神戸スタンダード」を身につける必要性を認識するように計画されていることは、高く評価される。

2. 注目される取組

- (1) 「GCP・チャレンジ合同報告会」を、プログラム参加学生が「全体で」実施することで、参加学生同士のネットワークが構築できるだけでなく、相互に刺激し、学生は、自らが参加したプログラムを新しい参加者に勧めるために、各自が参加したプログラムの改善への学生自身の参加意識も高まると期待される。（プログラム間での良い意味での競争心を刺激することができる。）
- (2) どんなに素晴らしいプログラムが企画されていても、参加学生（参加者）全員が、「無事に」「事故なく」帰国することが大前提である。GCPの全プログラム参加学生全員が「危機管理学修」を受講したことは、大いに評価すべきであり、次年度以降も「全員の受講」を徹底し、維持されたい。
- (3) 神戸大学の元留学生在が運営しているミャンマーの日本語学校でインターンシップを行う「インターンシップ・チャレンジ・コース<ミャンマー>」は、在校生と卒業生をつなぐだけでなく、その日本語学校で学ぶ生徒が、神戸大学への留学を希望する可能性もあり、「好ましい波及効果」を作ることができるものと期待される。

3. 今後の課題

(1) 卒業生との連携：

全プログラムに教員が引率したり、学生の滞在中に訪問したりすることは、コストもかかり、教員の負担も大きいと思われる。神戸大学の海外同窓会組織との連携を強める観点からも「インターンシップ・チャレンジ・コース<ミャンマー>」のように、現地のOB・OGを派遣学生の現地でのサポート役をお願いすることを検討されると良いと

思う。卒業生は母校への貢献を通じて母校へのロイヤリティーが高まると思われるし、参加学生は卒業後の進路を意識する契機を得ることもできると思われる。

(2) 参加学生の「人材バンク」化：

G C Pに参加した学生を「G C P応援団」のようなネットワークとして登録し、学内における新しい参加者募集や受験生対象のオープン・キャンパスでのG C P説明ブースの要員として活躍してもらったり、各プログラムの「プログラム参加マニュアル」作成などに巻き込むことを検討されると良いと思う。このような帰国後の参画を参加学生に義務付けることで、参加費に経済的支援を行うことへの学内・学外への理解も得やすくなると思われる。

(3) 「神戸スタンダード」と「G C Pの3つの目標能力」の関係の明確化：

「神戸スタンダード」の「複眼的に思考する能力」、「協働して実践する能力」、「多様性と地球的課題を理解する能力」に「G C Pの3つの目標能力」が、どう対応するのかをより明確にパンフレット等に記載するほうが良いと思われる。海外という「非日常」環境の中で、複眼的に思考したり、共に渡航した他の参加者と協働したりする場面に参加学生は直面する。また、訪問先の国・地域の文化や自然、人々との出会いを通じて、「多様性」を実体験し、地球的課題を目の当たりにするからこそ、G C Pが低学年向けに用意され、神戸スタンダードを在学中に身につける必要性を実感するのだと思われる。したがって、「チームワーク力」は「協働して実践する能力」の最初のステップであり、「自己修正能力」は「複眼的に思考する能力」につながり、「課題発見力」は「多様性と地球的課題を理解する能力」につながるものであることを前面に打ち出したほうが良いと思われる。

(4) プログラムの波及効果：

- ① G C P参加学生に帰国後、プログラム参加を通じて各自が発見した課題などについて、参加しなかった学生と共にグループで学修をする機会を設けることで、参加しなかった学生にも波及効果をもたらすことができるのではないかと。例えば、ミャンマーの日本語学校の教材づくりにおいて、参加学生が教材の改訂提案を現地で行っているが、帰国後も、海外における日本文化紹介に興味のある学生などを募り、スカイプ等を利用して継続して教材改訂を支援するサークルのようなものを作れば、参加学生以外にもインターンシップの疑似体験の機会を提供できるのではないかと。
- ② 神戸大学在学中の留学生に訪問国・地域についての事前講義や帰国後に参加学生が持ち帰った課題解決への糸口となるような勉強会の学修補助を務めてもらうことで、留学生にもC G Pへの参加機会が提供できるのではないかと。同時に、そのような事前・事後の学修の場に参加学生以外でも興味のある学生も参加できるものとするれば、キャンパス内での留学生との交流が促進され、留学生の自文化理解も深まると期待できる。

以上

外部評価報告

平成29年3月15日

京都大学大学院教育学研究科 教授 杉本 均

1. 総評

神戸グローバルチャレンジプログラムは、実践型グローバル人材の育成プログラムとして先駆的であり、創意的であり、価値ある取組みと認められる。すなわち、(1) クォーター制度との相乗効果、(2) 学部1・2年生を対象とした単位取得プログラム、(3) 全学・部局での取組み、の3点が特筆すべき点である。本プログラムは、神戸大学の全学における教育改革と連動し、神戸大学の正規カリキュラムとして、1・2年の学生の柔軟で自由な視野、主体的な関心に基づいたプログラムであり、初年度にして顕著な成果をあげている。一方、大学の正規プログラムとしての参加費用と責任の所在の問題、単位の根拠としての評価方法の問題などが、今後の課題として検討を期待するものである。

2. 注目される取組

(1) クォーター制度との相乗効果

神戸グローバルチャレンジプログラムは神戸大学の教育改革と連動しており、その一部において、平成28年度から導入された、2学期クォーター制を活用している。たとえば前期の第二クォーターと夏季休暇を組み合わせることによって4カ月近いギャップタムを確保し、これにより長期の海外インターンシップや在学中の留学が可能になっている。通常の履修科目を残りの3つのクォーターに短期8週授業として振り分けることによって、参加する場合には4年間での卒業を可能にし、参加しない学生への影響を最小限に抑えることが可能になっている。

(2) 学部1・2年生を対象とした単位取得プログラム

神戸グローバルチャレンジプログラムは学部1・2年生を対象としており、履修内容が高度に専門化する前の柔軟で自由な視野、また就職活動が本格化する前の学生の主体的な関心に基づいて参加が奨励されており、専門分野を超えて卒業時に身につけるべき3つの汎用能力「複眼的に思考する能力」「協働して実践する能力」「多様性と地球的課題を理解する能力」から構成される、「神戸スタンダード」育成の強力な基盤を形成している。またこの学修成果に対して総合教養科目の「グローバルチャレンジ実習」として1単位を与えることによって参加者の士気を高めるとともに、大学カリキュラムの一部として質の保証の責任を担っている。

(3) 全学・部局での取組み

神戸グローバルチャレンジプログラムは神戸大学のすべての学部・部局の参加を得てお

り、それぞれの部局の特徴と海外人材コネクションを生かしたユニークな取り組みが行われている。例えば、理学部による「サイエンスにおける異文化・異分野の理解と文理融合」、法学部のイスラーム圏の「法律事務所インターンシップ」、農学部の「UPLB 農学英語コース」など学部主導のプログラムがある一方、「アジア・フィールドワークコース」や「インターンシップチャレンジプログラム」など、学生の所属や専門を超えた、グローバルな環境での学生自身の変化と成長を想定したオープンエンドなコースなど、多様なプログラムが用意されている点は、既存のよくある「グローバル人材育成プログラム」と一線を画するものである。

3. 今後の課題

一方、神戸グローバルチャレンジプログラムには以下のような検討すべき課題もある。

(1) まず、これまでの多くの国際交流プログラムと異なり、プログラムへの参加に対して(一定の条件のもと)、単位を与えていることである。これは学生の参加意欲とプログラムの質の向上にとって極めて重要な要素である。もちろん、学生の成長、現地の人々との交流、異文化理解、(一部プログラムでは)現地への貢献などは、おおいに期待される成果ではあるが、これらは客観的な評価は難しい。プログラム修了にあたって与えられる1単位は何についての認定であるのか、認定しない場合は何が根拠となるのかをプログラム全体を通じて議論することは必要であろう。

(2) また単位を与えるということは、大学の正規のプログラムであることを宣言するものであり、大学としての質への責任も生ずる。問題が生じた場合の大学の責任も、そうでない場合に比して大きいといえる。また経済的な支援についても多くの努力がなされているとはいえ、参加は無料ではなく実際にはかなりの費用がかかってしまう。授業で使う教科書などは一定価格以下であることが求められながら、このプログラムの単位を取るために十数万円超の参加費を徴収することは、どのように説明可能であろうか。一部の学生に、自分はこのプログラムの対象から、最初から除外されていると感じる者がいないかどうか、慎重に考慮すべきである。

(3) 最後に、まだ開始されて間もない事業とは言え、今回の報告にはこのプログラムの実り多い成果を信じさせるだけのいくつもの事例や実績を見ることができた。何よりも実際に参加した学生の生の声を聞くことができたことは、価値ある情報である。またルーブリックなどを駆使して、その評価作業を可視化し、説明しようという努力は評価できるが、その多くが自己評価の域を出ていない点については今後、より客観的な評価方法の採用の可能性についての検討が望まれるところである。

外部評価報告

平成29年3月28日

立命館大学国際教育推進機構 准教授 堀江 未来

1. 総評

グローバルチャレンジプログラム（以下 GCP）は、学生の多様な海外体験を後押しし、グローバルな視野を広げるとともに各専門分野の学修への動機付けを高める上で非常に有益な取り組みである。とりわけ、柔軟な形で海外学修を可能にするためのクォーター制の導入、各部局での専門性に根付いたプログラム開発など、全学を上げての取り組みである点も注目に値する。以下、とりわけ注目される取り組み3点について指摘した上で、そのさらなる改善を前提とした提案をあわせて行いたい。

2. 注目される取組・今後の課題

① 神戸スタンダードの設定とルーブリック指標による評価

ルーブリック指標を設定したことで、学生にとっての「海外体験を通しての学び」に対する一定のめざすところを示すことができている。自己の学びを振り返る作業を通じてもさらに学びが深まることが予想される。一方、この評価制度は自己評価に基づくものであり、学生の中で評価のスタンダードが十分に理解されていない場合には、この仕組みが十分活用されないばかりか、逆効果になる可能性も考えられる（上位の到達点を想像できないなど）。主観的な自己評価に基づく評価制度のほか、なんらかの客観的な指標またはより具体的なガイドライン等があると、相乗効果が上がるものと考えられる。

② 事前学習の実施

海外体験をより豊かな学びに繋げるための事前学習機会が十分確保されており、このプログラムの効果を高めている。ここに、異文化環境における学び方のガイドラインや、体験学習理論・協働学習理論などについても学べる機会があると、学生がそれぞれに自立した学習者としてより高いレベルでの気づきを得られる可能性がある。また、異文化コミュニケーショントレーニングや適応理論などを学ぶことができれば、現地での危機管理にも役にたつのではないか。

③ 本プログラムの波及効果

本プログラムに参加する学生の割合は、全学からみると限定的である。しかし、これらプログラム参加者が、海外体験での学びをベースとし、学内における国際交流や派遣留学を促進するなど、様々なリーダーシップ活動を行うような場を準備することで、波及効果を高めることができると考える。